

## 3 歳児と保育者の身体接触の意味

水野 佑紀<sup>\*1</sup>・今村 光章<sup>\*2</sup>

本研究の目的は、保育における身体接触の意味を検討することである。そのために、3 歳児クラスを対象に保育者と幼児の身体接触を観察し、身体接触の回数及び意味を分析した。その結果、保育者と幼児の身体接触の多くは、必ずしも保育者による誘導や介入であることを意味するわけではなく、むしろ親和的な身体接触を意味することが多い場合があることが明らかになった。これは保育者が幼児と信頼関係を築く一手段として、身体接触を用いていることが関係すると推察される。また、保育者が様々な場面で身体接触を行うと、幼児からも様々な場面で身体接触があることが明らかになり、保育者が様々な場面で行う身体接触が、幼児が身体接触によって感情表出を行うための一助となることが示唆される。

〈キーワード〉幼児 (infant), 保育者(kindergarten teachers), 身体接触(body touches), 非言語(nonverbal)

### 1. 問題の所在

#### 1-1 本研究の目的と背景

本研究の目的は、幼児（小学校就学前の満 3 歳から 6 歳児）と保育者がどのような時に身体接触をするのかを調査し、それらの意味を分析することを通して、保育における身体接触のもつ意味を検討することである。

本研究を行う背景には、第一著者である水野佑紀が大学 3 年次に小学校教育実習において抱いた「子どもたちの身体接触にはその子の感情が少なからず表れているのではないか」という疑問がある。こうした疑問から、教師や保育者は身体接触など言葉以外の感情表現についても理解をすることが子ども理解を深めるのではないかと考え、本研究に着手した。そのため、本研究では単に身体接触に限らず、広い意味での非言語といった視点も加えて見ていきたい。

さて、2020 年 1 月以降、新型コロナウイルスの感染が拡大し、私たちの生活は激変している。たしかに、映像と音声を伝えるオンラインでは、想像もつかなかった様々なことができるようになった。実際に人に会わずにできることが限りなく増えている。だが、オンラインでは、実際に他者と身体接触をすることは不可能である。むしろ、

人に触れられて嫌悪感を抱く人は少なからずいるであろう。そのため、一概に身体接触をすると良いとは考えない。ただし、身体接触そのものは減少していると推測され、身体接触の機会の減少による問題も発現するのではないだろうかと推測される。

急激なオンライン化の影響ばかりではない。日本人は本来的に身体接触が他国に比べて少ないという先行研究もある。たとえば、渡邊拓真はデジタルデバイスの普及による子どもへの影響、Barnlund の研究から、アメリカ人は日本人の 2 倍の身体接触があり、日本人は文化的に身体接触が少ない点、セクシュアルハラスメント問題から身体接触を過度に恐れる風潮がある点などを踏まえ、人間関係において重要であるとされる他者との身体接触が減少することを危惧している<sup>1)</sup>。

以上のように、日本社会においては本来的に身体接触が少ないのにもかかわらず、コロナ禍でさらに身体接触の機会が減少したことが、幼児にも少なからず影響があるのではないだろうか。こうした背景も含めて検討をしていきたい。

#### 1-2 非言語的コミュニケーションの重要性

周知のように、非言語コミュニケーションは人間関係

\*1 岐阜大学教育学研究科 総合教科教育専攻      \*2 岐阜大学教育学部・教育学研究科  
Meaning of physical contact between three-year-old's-children and kindergarten teachers

において重要な役割を果たしている。たとえば、中村克樹は、非言語コミュニケーションが、①人だけではなく動物にもみられるものがあること、②生まれて間もない乳児にもみられるものがあること、③国境や文化を超えて共通のものがあることを踏まえ、非言語コミュニケーションがコミュニケーションの起源であることを示している<sup>2)</sup>。そして、非言語コミュニケーションは「相互理解を深める」「不必要な争いや衝突を未然に防ぐ」「より良い社会関係を築く」<sup>3)</sup>といった点から人間関係において重要な役割を果たしていると述べている。

保育の現場においても非言語コミュニケーションは重要である。鯨岡峻・鯨岡和子によると、「言語的なコミュニケーションに劣らず重要なのは、特に保育者と子どもとのあいだで交わされる非言語的コミュニケーション」<sup>4)</sup>である。大黒岳彦はノンバーバル・コミュニケーションの一つとして「接触」を挙げている<sup>5)</sup>。(なお、本研究においては「非言語コミュニケーション」「ノンバーバル・コミュニケーション」と「非言語的コミュニケーション」は言葉以外のコミュニケーションとしてほぼ同義とみなし、非言語コミュニケーションと記す。)

また、無藤隆は、「幼児はことばだけでやりとりすることは少なく、身体がことばの代わりや補足として機能している。他のモダリティではありえない全身性のコミュニケーションである身体接触は、ことばによる感情表現がまだ十分にできない幼児にとっては重要な意味があり、身体接触とことばは互いに影響しあっていると思われる」<sup>6)</sup>と主張している。

このように、非言語コミュニケーションは、保育者が子どもたちと気持ちを分かち合う上でも、また、子ども同士の間においても非常に重要であると言えよう。もちろん、幼児は少しずつ言葉で話すことができるようになるが、その言語発達の過程で、感情を伝えるためや補足として、非言語コミュニケーションを多く用いている。その発達の中では、言葉で上手く表せない気持ちを、非言語コミュニケーションを通して表していることは多いと推測できる。

### 1-3 身体接触の意義

では、次に親子間及び保育者・幼児間の身体接触に関する文献を概観しておこう。

山口創は、皮膚は露出した脳ともいわれ、皮膚感覚は視覚と異なり、あまり加工されずに脳に届いていると説明している。さらに、幼少期の親子の身体接触が及ぼす効果としては「子どもの情緒の安定をもたらす、攻撃性を低下させ、社会性を伸ばす、などがある」こと「その効果は成人後まで続く」ことを明らかにしている<sup>7)</sup>。このように親子の身体接触(スキンシップ)は気持ちの安定につながるため幼児にとっては甚だ重要であることが分かる。

また、岩田純一は母子の緊密な結びつきには触覚や嗅覚などの近感覚が中心的な役割を果たしていると主張する<sup>8)</sup>。その理由として、母親に触ったり、匂いをかいだり、ミルクやごはんを味わったりといった近感覚が主となっているからである。そして、岩田は根源的である近感覚こそ、「愛着関係や自己感覚をつくりあげていく際の根底にある」<sup>9)</sup>と説明し、「幼い子どもが怖い経験をしたときなど、「だいじょうぶよ」「だいじょうぶここにいるから」と声をかけるよりも、母親が抱きしめてやる方が子どもは安心する。情緒的に混乱したときなども、ことばでなだめるよりも、むしろ抱きしめるといった身体的な接触の方が有効である。」<sup>10)</sup>とまとめている。要するに、初期の母子関係では身体的な生身の接触が重要な意味を持つということである。

しかし、岩田は発達に伴って、主の感覚が近感覚から見ると、聞くといった遠感覚へと移行してくると言う。先の例では、「子どもは母親にしっかり抱きしめられなくとも、向き合った母親の姿をみるだけで安心する」、「母親のやさしい声を聞くだけで心理的な拠り所とできるようになってくる。」<sup>11)</sup>そして、そのうち母親の姿を思い浮かべ、声を思い起こすだけで、自分の心理的な拠り所ともできるようになると述べる。それが心理的な自立(距離化)であるという<sup>12)</sup>。つまり、接触等の近感覚を通して、十分な信頼関係ができることが自立へとつながると理解できる。

加えて、ボウルヴィ(John Bowlby: 1907-1990)は子どもの育つ環境によって大きく左右されることを明らかにしている。「母親から愛情を受けずに育った子どもたちには、身体的、情緒的、知的・言語的発達に遅れが見られた」<sup>13)</sup>とし、「乳幼児期の健全な発達にとっては、親子関係、特に母親との接触がかけがえのないほど重要であると言える」<sup>14)</sup>と言う。こうしたボウルヴィの主張から

も、母親からの愛情や身体接触は子どもたちの成長に非常に重要であると言えるだろう。

さらに、今川真治らは「日常的にあまり抱きしめを行っていない父親と母親は、抱きしめを経験することで、児に対する肯定的な感情得点を上昇させ、否定的な感情得点を低下させる傾向がみられ」<sup>15)</sup> としている。つまり、「抱きしめるという行為が、親子の物理的な距離だけでなく、心理的な距離をも縮めたことがもたら」<sup>16)</sup> すというのである。そして、「親が児を抱きしめるという行為は、愛情表現としての行為であるだけでなく、親にとって児を理解するための手段のひとつであると言えるのではないか」<sup>17)</sup> と問いかける。

では、親でない場合の大人から子どもへの身体接触はどのように理解すべきなのか。

山口の紹介するティファニー・フィールドらの研究では、ハリケーンに被災した子どもたちを対象にマッサージの効果を検討したところ、「不安や抑うつが低くなり、PTSD の症状は改善し、幸福感を感じ、ストレスホルモンであるコルチゾールのレベルも低くなった」<sup>18)</sup> ことを実証的に明らかにしている。この実験では、母親でなく研究所の職員、つまり他人が身体接触をしても効果があったと述べられている。この研究から、身体接触は子どもたちの中にある不安を接触によって和らげることができると推察する。加えて、親でなくても、気持ちを和らげることが可能であると言えるだろう。

加えて、塚崎京子・無藤隆は「保育者と子どものスキンシップは、「両者の身体が直接繋がっている」ということから、「両者の関係が繋がっている」ということを子どもに実感させるという点で、保育場面において重要な役割を果たしていると言える」<sup>19)</sup> と言う。たとえば、幼児が保育者と手を繋ぐことで、安心するという場合が想起されるだろう。さらに、様々な場面で保育者とのスキンシップを体験し、幼児が他児と保育者の「スキンシップのあり方を見ることによって、スキルを学び、仲間関係において模倣しあう」ことから、「保育者のスキンシップが親和的身体接触のモデルになっていると言える」<sup>20)</sup> と述べている。このように、保育者と幼児の身体接触は信頼関係を築く上で重要であると考えられる。

では、幼児の年齢によって保育者と子どもの身体接触にはどのような違いがみられるだろうか。

塚崎・無藤は、3 歳児の拒否は、より具体的で直接的なやり取りの中で発生し、その表現形態も攻撃的拒否といった身体行動で表されることが多く、拒否が発生すると子どもによる解決が困難であるため、保育者がいざこざの原因を把握して、関わりに対する判断を行う必要性が生じることがわかっている<sup>21)</sup> と説明している。

藤田清澄も「3, 4, 5 歳児と年齢が進むに連れて保育者—幼児間の身体接触が減少していること」<sup>22)</sup> を示している。

他にも珠玉の研究があるが、紙幅の都合で触れないとしても、総じて、先行研究では、保育者と子どもの身体接触の意味に着目をして研究したものは多くはない。このため、本研究は保育者と幼児の身体接触の意味について調査し、またそれらの意味をより詳しく分析するため、詳細な分類まで分析を行う。また、クラス一人ひとりの子どもと保育者の身体接触についても分析をすることで、個別的な理解も深めていく。年齢における身体接触の違いを踏まえ、3 歳児クラスに限定した。

## 2. 研究の方法

### 2-1 研究対象

本研究は東海地方にある X 私立幼稚園の保育者と幼児を対象に実施された。X 幼稚園はキリスト教のカトリックの精神に基づいた保育・教育が行われている園である。園の特色として、心の教育やスキンシップを大切にしている。X 幼稚園の全園児は約 120 名で年長、年中、年少のクラス数は各 2 クラスである。

研究対象のクラスは、主担任 B 先生、満 3 歳児を中心とした加配 A 先生（どちらも保育歴 30 年以上）、加配 C 先生が担当され、3 歳児クラスの男児は 13 名、女児は 8 名、合計 21 名（そのうち満 3 歳児は男児 2 名、女児 2 名）である。本研究は、A 先生と幼児の身体接触を中心に観察した。

### 2-2 観察日時

観察日時は、2020 年 11 月 16 日から 12 月 21 日までの間の 10 回である。観察時間は、朝の活動から 1 時間である。この時間にフィールドノートを用いたメモ書きによる観察を行った。（11 月 25 日、11 月 30 日は園の事

情により A 先生が他クラスで保育をしていたため、そのクラスを観察した。) 記録したデータをフィールドノートにまとめ、PC 入力し、データ化して言語化した。

### 2-3 接触回数のカウント方法及び分類方法

前出の塚崎・無藤の研究では、接触回数について、「1 つの行為につき 1 カウントとし「叩く」行為などで、連続して叩き続けたとしても、1 つの行為としてカウントした。しかし、一旦行動が止まり再び叩きだした時は、また新たな行為としてカウントした」<sup>23)</sup> としている。

だが、本研究では、連続して何回接触をするかで意味の強さや感じ方が変わる可能性があると考えられるため、1 回の接触につき 1 回とカウントした。なお、いくつかの意味が考えられる身体接触についてはより強い意味を持つと考えられる 2 つの意味に分類し、それらは 0.5 回ずつとしてカウントした。

分類項目は、塚崎・無藤の分類を基に、保育者からの身体接触の分類を行うため、それらが含まれる意味について一部変更をし、小分類として分類を行った。その分類は「親和的」「中立的」「否定的」「偶発的」「不明」であり、その意味は、以下の＜分類項目＞の表の通りである。

また、それぞれの分類内容については、塚崎・無藤の分類を基に藤田が定義した身体接触の分類の定義（中立的では相手の手を引いて場所を移動するなどの誘導的な意味の接触をする【誘導】<sup>24)</sup> など）を基にした。事例は本研究で得られたものを基にした。

＜分類項目＞

大分類	小分類
「親和的」	親近感 思いやり 甘え
「中立的」	指導 呼びかけ 補助
「否定的」	不安 拒否・抵抗
「偶発的」	興奮 無意図的
「不明」	不明・その他

＜小分類の事例＞

親和的	<ul style="list-style-type: none"> <li>・親近感</li> <li>遊びで手と手で押し合いっこをするなど楽しんでいるときや親しみを持って接触する</li> <li>・思いやり</li> <li>ありがたうと言いながら触れるなど気持ちを込めて接触する</li> </ul>
-----	--

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・甘え</li> <li>おんぶをしてもらおうと背中に乗るなど甘えの気持ちを持って接触をする</li> </ul>
中立的	<ul style="list-style-type: none"> <li>・指導</li> <li>他児が嫌がるようなことをした際に止める、糊の付け方を教える、列に並ぶ場面で自分から並んでいる子をなでるなど教える、注意するなどその行動を認める時に接触する</li> <li>・呼びかけ</li> <li>先生を呼ぶとき手で背中に手に触れるなど、相手に話しかけたり、呼びかけるための接触をする</li> <li>・補助</li> <li>ブランコをしている背中を押すなど行動を助けるための接触をする</li> </ul>
否定的	<ul style="list-style-type: none"> <li>・不安</li> <li>他児のところへ行く先生のところへ行き、手を引っ張るなど不安を持って接触をする</li> <li>・拒否・抵抗</li> <li>嫌だと言って手を払うなどその行動に対し、拒否や抵抗の意味合いの接触をする</li> </ul>
偶発的	<ul style="list-style-type: none"> <li>・興奮</li> <li>興奮状態で落ち葉の入った袋を持っている手に接触するなど、興奮して思わず接触する</li> <li>・無意図的</li> <li>糊を取ろうとする先生と幼児の手が当たるなど、意図せず偶然ぶつかる、当たるといった接触をする</li> </ul>
不明	<ul style="list-style-type: none"> <li>・不明・その他</li> <li>おしっこがもれていないかズボンを触って確認するなど意味を受け取ることができない、または心情を表す意味をもたない接触をする</li> </ul>

### 2-4 倫理的配慮

本研究の実施に際し、X 幼稚園の園長、副園長及び担任、その他教職員に研究の趣旨を説明し、了承を得た。園名、個人名は記号化し、個人が特定されないように配慮した。

### 3. 結果と考察

本研究の結果と考察については、A 先生の身体接触を中心に考察する。ここでは、A 先生から幼児への身体接触、A 先生に対する幼児の身体接触、他の先生と A 先生の保育者・幼児間の身体接触の比較について順に見てい



くことにしよう。

### 3-1 A 先生から幼児への身体接触

まず、先行研究と身体接触の回数を比較してみよう。

先行研究では、保育者と子どもの身体接触は「意味においては中立的なものが最も多く、全体の 73%を占めている」とあり、「保育者と子どもの身体接触の多くが保育者による誘導や介入であることを意味する」<sup>25)</sup>と述べている。

しかし、本研究では A 先生と 3 歳児の身体接触で中立的の割合は 43.18%であり、むしろ親和的の割合の方が 50.92%と高い結果となった。それは、A 先生と幼児の身体接触に限らず、B 先生と幼児、C 先生と幼児においても同様の結果となった。（その割合は後述する。）

上記の理由として、研究対象の保育者が、「指導」や「補助」等の時だけではなく、様々な場面で接触を行っていること、及び「思いやり」に属するような子どもたちを安心させる接触を多く行っていることが考えられる。第一著者は、A 先生から「子どもとの信頼関係を築くことが大切で、その手段の一つとしてスキンシップがある」とお話を伺った。また、A 先生のスキンシップはその触れ方一つをとっても優しく、子どもたちへの想いが伝わるような触れ方であった。それは、身体接触に限らず、声のかけ方、表情においても同様であった。このような A 先生の関わり方は、子どもたちが安心して幼稚園に通い、他児と関わるための基盤ともなっているのではないだろうか。

なお、大分類における分類は A 先生と幼児間：親和的 50.92%，中立的 43.18%，否定的 3.02%，偶発的 1.71%，不明 1.18%，B 先生と幼児間：親和的 68.07%，中立的 24.94%，否定的 0%，偶発的 6.99%，不明 0%，C 先生と幼児間：親和的 41.25%，中立的 31.25%，否定的 7.50%，偶発的 20.00%，不明 0%であった。

次に幼児ごとに見ていくと、グラフ 1 より、A 先生から Z くんへの身体接触が最も多く、次に L くん、その次に Y ちゃんとなっている。またそれ続き、F くん、V くん、X くん、W ちゃん、J ちゃんと続いている。接触の数が最も多かった Z くんは満 3 歳児である。他に、満 3 歳児は Y ちゃん、X くん、W ちゃんである。

ここから A 先生は、3 歳児と比較し、満 3 歳児への身体接触の回数が多いことが分かる。また、小分類による分

析より、満 3 歳児への身体接触は補助の意味を持つものが多かった。幼稚園に来たばかりの満 3 歳児に安心できるよう多く接触をしているとも推測できる。以下で満 3 歳児に関する記録を見ていきたい。

#### 事例 1 11 月 20 日金曜日 天気：曇り

入園したばかりの満 3 歳児の Y ちゃんは、18 日ではお姉ちゃんがいなくて不安そうであったが、20 日になって、A 先生との関係が以前よりもできてきたように見えた。少しの間、お姉ちゃんがいなくても頑張れるようになった。それは、A 先生が満 3 歳児クラスで関わっていたことも関係があるとは考えられるが、幼稚園で安心できるよう、A 先生がスキンシップや声かけをされていたことが関係しているのではないかと考える。

塚崎・無藤は、保育者は、入園当初の不安から消極的になっている子どもを、受容的なスキンシップで受け止めることによって、子どもとの信頼関係を築き上げる。その結果、子どもは保育者を安全基地として、他の子どもと積極的に関われるようになると述べている<sup>26)</sup>。

この研究からも、入園したばかりの満 3 歳児の子どもたちは保育者から受容的な、思いやりの気持ちのこもった接触をされることで、安心し、他児と関わるができるようになるとも言えよう。

3 歳児は L くん、F くん、V くんへの身体接触が多かった。L くんは落ち着いていることが難しい子であり、他の先生とも身体接触の回数が多い。F くんは、元気いっぱいな子で、F くんからの身体接触も多い。また、興奮すると周りが見えなくなってしまうこともあった。この記録中に指導の意味を持つ身体接触が多かった事例 2 の日があった。それにより、指導の分類の割合が増えている。ここでこれに関する記録も見たい。

#### 事例 2 11 月 23 日火曜日 天気：晴れ

外での自由遊びの時間では、子どもたちも A 先生も思う存分遊んでいた。遊びに夢中になっていた F くんは A 先生のマスクのゴムを引っ張ってマスクのゴムが切れたり、他児に砂がかかったりした。F くんは興奮していて、周りが見えなくなっていたことから A 先生から F くんへ指導に分類される接触が多く

あった。A 先生によると、F くんは気が散る、分かっているにもかかわらず。そのため、話に集中できる場所に連れていき、そして、気が散って周りのほうを向いたら、先生の方を向くように手で F くんの手を戻していた。そして、A 先生は F くんが分かるまで話し、彼が理解できたら、抱きしめている。このように話を聞く姿勢を整える、指導をしても、伝わったら抱きしめることで、A 先生は F くんに対して指導をしつつも、F くんのことを想って指導をしていることが F くんには伝わっているのではないかと考える。

この日の F くんは興奮状態であったようにも見え、これが身体接触の増えた理由の一つであるとも考える。

V くんは事例 3 に挙げられるように気持ちを裏目に出してしまうことがある子である。

#### 事例 3 12 月 8 日火曜日 天気：晴れ

V くんは教室内ではとても良い子にしていた。外では、スコップで地面を叩いたり、入ってはいけないトイレに入って、友達を閉じ込めたり、V くん自身が閉じこもったりした。それは、教室で良い子にしていたことを先生方にもう少し注目してもらいたかったという気持ちがあったのではないかと考えた。心のどこか上手くいかない気持ちがそういった行動に出ているようにも見えた。

V くんのことを A 先生はよく理解をされているため、V くんが落ち着くよう、「V くんのことを分かっているよ」とよく身体接触をされているのではないかと考える。

なお、＜グラフ 1＞からも分かるように、A 先生は身体接触の回数が幼児によって異なっている。A 先生は「スキップという方法が合う子、合わない子がいるため、その子に合った方法で関わるようにしている」と第一著者はお話を伺っている。この姿勢が関係しているのではないかと考えている。

### 3-2 A 先生に対する幼児の身体接触

A 先生に対する幼児の身体接触について言及しよう。

幼児から A 先生への身体接触の回数（1 回の記録あたり 8.50 回）と比べ、A 先生から幼児への身体接触の回数

（1 回の記録あたり当たり 29.60 回）が多いことから、A 先生は積極的に身体接触を行っていることが分かる。B 先生、C 先生においても同様の結果となっているため、保育者の方が幼児に数多く身体接触を行っていると言える。

上記に関して、先行研究を基に考える。塚崎・無藤の研究では、子どもから保育者への身体接触は、夏休みを境に分けた前期と後期を比べると、後期の方が減少したことから<sup>27)</sup>、今回の調査は後期に当たる時期に行ったため、少なかったという可能性が挙げられる。またそれは、保育者が子どもたちの接触を十分に受けとめたからこそ、子どもたちは保育者との信頼関係を築くことができた結果であると述べられているため<sup>28)</sup>、調査を行った幼稚園の先生方も、前期に十分に子どもたちの接触を受けとめていたのではないかと推測する。

グラフ 2 を踏まえて言えば、L くんは身体接触が最も多く、次に O くん、その次に F くんとなっている。そして、小分類においては甘えが 48.82%と約半数を占めている。これに関しては、以下の事例が挙げられる。

#### 事例 4 11 月 27 日金曜日 天気：晴れ

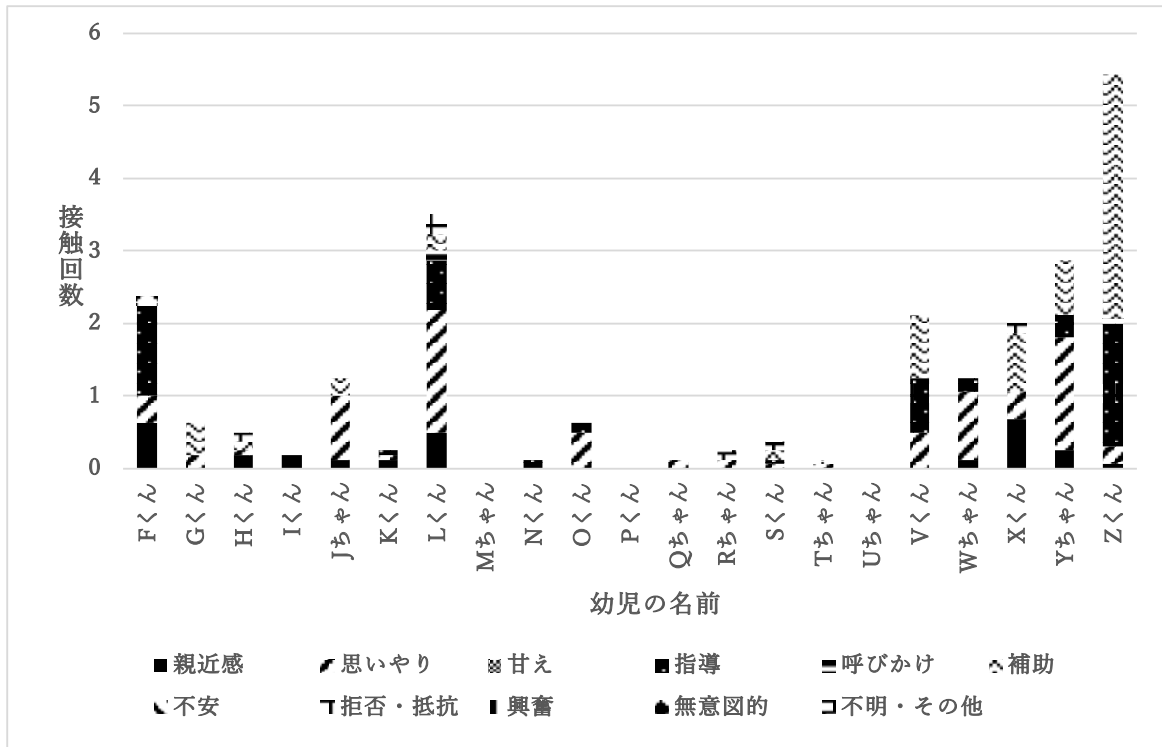
絵本の部屋では L くんから A 先生への接触が多い。A 先生が満 3 歳児の子どもたちを中心に関わっているのを見て、「僕も」と甘えていたのではないかと考える。O くんも少し甘えたかっように見え、接触があった。しかし、L くんや O くんだけでなく、H くん、G くんも A 先生へ近づいたり、手で腕に触ったりしていた。3 歳児の子も A 先生と遊んだり、甘えたかっのではないかと考えた。

事例 4 では、子どもたちが甘えたいという気持ちを、身体接触を通して表現していることが推測できる。

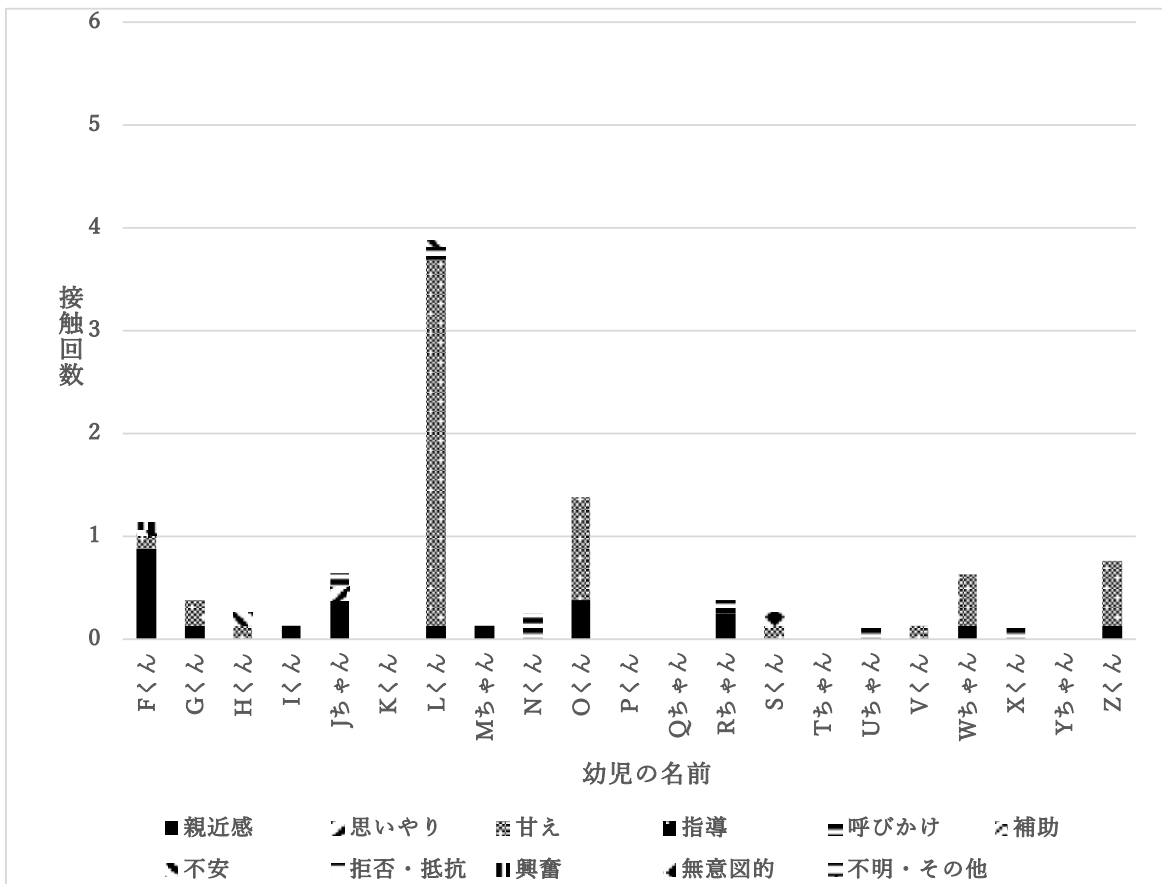
### 3-3 他の先生と A 先生の保育者幼児間の身体接触の比較

本研究では、A 先生を中心に幼児と保育者の身体接触を観察したため、B 先生、C 先生は完全な比較対象とはならないことを前提として考察を行った。

大分類における割合は先述した通りであるが、小分類における割合を見ると、先生による身体接触の意味の違いが見られる。例えば、B 先生は親近感の意味を持つ身体接触が A 先生、C 先生と比較して約 10～25%程度多



グラフ1 A 先生から幼児への1回の記録あたりの身体接触の回数



グラフ2 幼児からA 先生への1回の記録あたりの身体接触の回数

表1 保育者から幼児への1回の記録あたりの身体接触の回数

大分類	親和的			中立的			否定的		偶発的		不明
小分類	親近感	思いやり	甘え	指導	呼びかけ	補助	不安	拒否・抵抗	興奮	無意図的	不明・その他
A先生	2.45	10.40	0	9.25	0.15	6.35	0	0.30	0	0.30	0.40
B先生	1.29	1.79	0	1.64	0.29	0.14	0	0	0	0.29	0

表2 幼児から保育者への1回の記録あたりの身体接触の回数

大分類	親和的			中立的			否定的		偶発的		不明
小分類	親近感	思いやり	甘え	指導	呼びかけ	補助	不安	拒否・抵抗	興奮	無意図的	不明・その他
A先生	2.40	0	4.15	0	0.70	0	0.65	0.20	0.15	0.20	0.05
B先生	0.86	0	1.71	0	0	0	0	0	0	0.29	0

く、C先生は指導の意味を持つ身体接触がA先生、B先生と比べて約10%程度多い。その他、どんな時に身体接触をするかが、先生によって異なっている。

B先生に関して、表1及び表2よりB先生から幼児への身体接触及び、幼児からB先生への身体接触の回数はA先生に比べて多くはない。

B先生は研究対象のクラスの主たる担任であるため、B先生は毎日の活動を展開する、クラスを動かしていくことが多い。そのため、3歳児が状況を判断し、B先生との接触が少なくなっているとも推察できる。また、単純にB先生の接触回数が多くはないため、幼児からも接触回数が多くないとも考えられる。

このことはC先生においても同様である。C先生はLくんを中心に関わっていることが多いため、Lくんと一緒にいるときは他児が接触をしていないとも推測できる。

B先生からはTちゃんへの接触が最も多く、次にGくん、Lくと続いている。そして幼児からは、Tちゃんからの身体接触の回数が最も多く、次にGくんとなっている。

#### 事例5 11月20日金曜日 天気：曇り

遊技場ではTちゃんはB先生と一緒にいた。保護者の方が来る日であったため、Tちゃんは興奮していたのも原因であると思うが、B先生と遊ぶことや、一緒にいることが、とても嬉しそうだった。GくんもB先生と一緒にいて嬉しそうだった。2人は早生まれのため、他児よりも先生と一緒にいたいという気持ちが大きいのかもと考える。

また、B先生が子どもたちと遊べるような状態であったことも子どもたちがB先生とたくさん関わることができた理由であると考えられる。

このように、B先生から幼児に対する身体接触、幼児からB先生への身体接触において、共にTちゃん、Gくんの回数が多かった点に関して考察しよう。

塚崎・無藤は、土田昭司・竹村和久の研究を踏まえた上で、「3歳児同士の身体接触も、成人対象の調査結果と同じく「気持ちが良い」という感覚的なものよりも、接触の意図や相手との相性、状況判断や認知によって評価されることがわかった」<sup>29)</sup>ことを示している。つまり、3歳児の接触は成人と同様に、感覚的なものよりも、接触の意図や相手との相性、状況判断や認知によって行われていると言い換えられると考えられる。

上記を踏まえ、TちゃんとB先生は相性が良いまたは、信頼関係ができていると考察できよう。Tちゃんは他の先生との身体接触はあるものの、B先生との身体接触ほど多くはない。ただし、記録の数が少なく、事例5の日にTちゃんとB先生が長い時間一緒にいたため、この日の接触回数が多く、記録に大きく影響を与えているとも考えられる。

反対に、B先生はLくんへの身体接触の回数は多いが、Lくんからは接触がない。これは、Lくんはよく見てくれるC先生や身体接触の回数の多いA先生との関わりが多く、B先生と関わる機会が少ないためであると推測する。

C先生についても、同様のことが言えるだろう。C先生



からは L くんからの身体接触の回数が最も多く、幼児からも L 君からの身体接触の回数が多い。L くんは C 先生がよく見ている幼児であるため、L くんも接触を多く行っていると考えられる。なお、L くんが A 先生への身体接触の回数の方が多く理由は主として A 先生を研究対象としたため A 先生に関する記録が多いことが理由であると考えている。

さらに、A 先生は B 先生、C 先生に比べ、多くの幼児に数多く、様々な場面において身体接触をしていることは回数及び第一著者の観察を通して明らかであった。そして、クラスの多くの幼児からも様々な場面で接触が見られ、その回数も多かった。

これらの結果と考察を踏まえて、保育者が様々な場面で身体接触を行うと、幼児もその保育者に対し、様々な場面で身体接触を行いやすくなるのではないかと考えられる。つまり、保育者の身体接触が、幼児の身体接触による感情表出の一助となるとも示唆される。

#### 4. 総合的考察

本研究から、保育者と幼児の身体接触の多くは必ずしも保育者による誘導や介入であることを意味するわけではないことが明らかになった。むしろ、親和的な身体接触の方が、中立的な身体接触と比較し、どの先生も高い割合となった。この理由として、研究対象の保育者が、様々な場面で身体接触を行っていること及び「思いやり」に属するような子どもたちを安心させる接触を多く行っていることが考えられる。また、幼児との信頼関係を築く一手段として身体接触を行っていることも関係すると考察した。

また、保育者が様々な場面で身体接触を行うと、幼児からも様々な場面で身体接触があることが明らかになった。これに関し、保育者が様々な場面で身体接触を行うと、幼児もその保育者に対し、様々な場面で身体接触を行いやすくなるのではないかと考察した。よって、保育者が様々な場面で身体接触を行うことが、幼児の身体接触による感情表出の一助となることが示唆された。

さらに、塚崎・無藤が述べた入園当初の不安のある幼児が、保育者からの受容的なスキンシップによって、保育者を安全基地として、他の子どもとも積極的に関わられるようになることに加え<sup>30)</sup>、入園当初の不安のある満 3 歳児

においても保育者の身体接触が重要であることが推察された。

また、3 歳児の身体接触は相性や状況判断が関係していることは本研究においても推察され<sup>32)</sup>、加えて身体接触を行う保育者と幼児の信頼関係も関係があると推察された。

そして、後期（夏休み以降）は幼児から保育者の身体接触が少ないこと<sup>31)</sup>（前期に保育者が子どもたちの身体接触を十分に受け止めたと推測される）は本研究においても同様に推察された。

なお、前述したとおり、本研究では、主として A 先生を研究対象としたため、B 先生、C 先生の行動は十分に記録が取れていない面がある。そのため、A 先生と B 先生、C 先生は本論文においては、完全な比較対象とはなっていない。また、記録をとった日数が少ない点及びデータが不十分な点があり、全ての結論を確認するまでには至らなかった。こうした点については今後の研究の課題としたい。

#### 引用文献

- 1) 渡邊拓真, 2019, 「対人関係における身体接触の意義に関する論考：両価値的な機能の検討に向けて」, 愛知教育大学 幼児教育研究第 20 号, p.97.
- 2) 中村克樹, 2004, 「非言語コミュニケーションの意義」, 学術の動向, p.29.
- 3) 中村, 前掲書, p.29.
- 4) 鯨岡峻・鯨岡和子, 2001, 『保育を支える発達心理学』, ミネルヴァ書房, pp.183-184.
- 5) 大黒岳彦, 2005, 「ノンバーバル・コミュニケーションの諸相」, 情報コミュニケーション学研究, p.105.
- 6) 無藤隆, 1997, 『協同するからだとは：幼児の相互交渉の質的分析』, 金子書房, p.14.(初出は, 塚崎京子・無藤隆, 2004, 「保育現場における 3 歳児の身体接触の変容」, 乳幼児教育学研究 第 13 号, p.14.)
- 7) 山口創, 2009, 「皮膚と心」, 『Mind-body science: 人体科学とニューサイエンスの情報誌』 所収, p.12.
- 8) 岩田純一, 2003, 「子どもと出会う (3) 『スキンシップ』考」, 日本幼稚園協会, 幼児の教育 103(3), pp.18-25.
- 9) 岩田, 前掲書, p.23.

- 10) 同書, p.23.
- 11) 同書, p.23.
- 12) 同書, p.24.
- 13) 成田朋子, 2018, 『新・保育実践を支える 言葉』, 福村出版, p.64.
- 14) 成田, 前掲書, p.64.
- 15) 今川真治・山元隆春・財満由美子・林よし恵・上松由美子・松本信吾・松浦あずさ, 2009, 「『抱きしめる』ことが親の子に対するイメージに与える影響に関する研究(2)」, 広島大学 学部・附属学校共同研究機構研究紀要第 37 号, p.258.
- 16) 今川ら, 前掲書, p.258.
- 17) 同書, p.258.
- 18) 山口創, 2018, 『手の治癒力』, 草思社.p.101.
- 19) 塚崎京子・無藤隆, 2004, 「保育者と子どものスキンシップと両者の人間関係との関連: 3 歳児クラスの観察から」, 保育学研究, 第 42 巻第 1 号, p.49.
- 20) 塚崎ら, 前掲書 p.49.
- 21) 塚崎京子・無藤隆, 2004, 「保育現場における 3 歳児の身体接触の変容」, 乳幼児教育学研究 第 13 号, p.14.
- 22) 藤田清澄, 2011, 「遊びの中で見られる幼児の身体接触の意味: 身体知の視点から」, 保育学研究, 第 49 巻第 1 号, p.32.
- 23) 塚崎京子・無藤隆, 2004, 「保育現場における 3 歳児の身体接触の変容」, 乳幼児教育学研究 第 13 号, p.15.
- 24) 藤田清澄, 2011, 「遊びの中で見られる幼児の身体接触の意味: 身体知の視点から」, 保育学研究, 第 49 巻第 1 号, p.31.
- 25) 塚崎京子・無藤隆, 2004, 「保育現場における 3 歳児の身体接触の変容」, 乳幼児教育学研究 第 13 号, p.17.
- 26) 塚崎京子・無藤隆, 2004, 「保育者と子どものスキンシップと両者の人間関係との関連: 3 歳児クラスの観察から」, 保育学研究, 第 42 巻第 1 号, p.49.
- 27) 塚崎ら, 前掲書, p.44.
- 28) 塚崎ら, 同書, p.44.
- 29) 塚崎京子・無藤隆, 2004, 「3 歳児の仲間関係における身体接触」, お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要 (1), pp.73-74.
- 30) 塚崎京子・無藤隆, 2004, 「保育者と子どものスキンシップと両者の人間関係との関連: 3 歳児クラスの観察から」, 保育学研究, 第 42 巻第 1 号, p.49.
- 31) 塚崎ら, 前掲書, p.44.
- 32) 塚崎京子・無藤隆, 2004, 「3 歳児の仲間関係における身体接触」, お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要 (1), pp.73-74.

#### 謝辞

観察をさせていただきました X 幼稚園の教職員の皆さまに心より御礼いたします。また、観察及びそれに関する貴重なお話を聞かせていただきました A 先生に深く感謝いたします。